

ディベートを用いたアクティブラーニングの試み

国際コース1年前期「基礎演習」での取組

呉宣児・新井健一郎・謝志海・大沼久夫・張渭涛

キーワード

アクティブラーニング ディベート式 プレゼンテーション 深い学び 個人課題 集団協力 基礎演習 大学1年生

要旨

共愛学園前橋国際大学の国際コース1年生の前期授業である基礎演習Ⅰの受講生(1ゼミ13人×5ゼミ、計65人)を対象に、6週間にわたる「ディベート式プレゼンテーション大会」を用いたアクティブラーニングを試みた。その取組を振り返り、教育実践のプロセスや学生の感想と評価をまとめた。学生たちは、最初はやり方が良く分からず、班ごとの協力がうまくできていなかったが、自ら資料調査を行い、話し合いながら共同作業をしていくうちに、班のメンバー同士の関係が良くなり、内容の学びが深くなり、プレゼンテーションやディベートを経て相手チームの異なる視点を学び、達成感を味わったという感想・評価が多く報告された。しかし5%~10%の学生からは、ネガティブな報告・評価があった。高校を卒業したばかりで、大学での友達関係もまだ十分に確立されていない1年前期だからこそ、多方面(調べる、理解する、論理づけてまとめる、発表する、討論する、協力する)の実践が伴うアクティブラーニングへの取り組みの意義は大きく、教授法として検討し広げていく必要があるだろう。しかし、満足感よりはネガティブな評価をした10%の学生への対応が課題として残された。

1 目的

日本では、1990年代半ば頃より徐々に、アクティブラーニング(active learning)を推進する実践が見られ始めたが、最初は単に講義を聞くだけの受動的な学びを乗り越えるという意味合いに止まっていた。しかし、2012年中央教育審議会の「質的転換答申」に「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて一生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」に典型的に見られるように今日の実践の多くは「アクティブ」のポイントを積極的に特定するようになってきた(松下, 2015)。

このような流れのなか、日本の学校教育の中で反転授業、PBL (Problem-Based Learning)、LTD (Learning Through Discussion)、ルーブリック評価、授業の質的転換などの言葉や様々な取組の実践例と教授法、理論などを取り上げられることも急速に増えてきた（例えば、ジョナサン, 2014; 溝上, 2014; 松下, 2015; 文部科学省, 2014; ダネル, 2014 など）。

アクティブラーニングの戦略としてよくあげられるのが PBL である。西欧諸国における PBL の歴史は日本より長い。学生が急増した 1960 年代の学生運動の中でマスプロ教育や従来型の教育に対する批判が起り、その改善策として提案された新しい取組がカナダにおける McMaster 大学の医学部での取り組みであり、その成功が PBL の拡散のきっかけであった（磯田、下田、内山、2013）。

このように世界や日本において教育・学習パラダイムの変換が起きているなか、具体的な教育現場（授業）での教育実践は、教員一人一人の裁量に任せられているのが現実でもある。このような背景のなか、筆者達が所属する共愛学園前橋国際大学（以下 K 大学）の国際コースで、高校を卒業してまだ十分に大学システムに慣れておらず、人間関係も十分に築けてない 1 年生の前期授業である基礎演習のなかで、大学での学びのための基本的なスキルを実際に行う（Act）ことにより学ぶことを目指し、コースの教員全員の協力で新しい取組を試みることとなった。

本研究ノートでは、高校を卒業したばかりの大学 1 年前期という時期に試みた授業実践（2015 年度）で取り組んだアクティブラーニングの実践例を振り返り、授業実践のプロセス、特徴、意義や課題等を整理することを目的とする。これらの作業は、今後の教授法の開発につなげていくための示唆を得ることに意義があると考えられる。

溝上（2015）は、アクティブラーニングを定義することは難しいとしながらも、「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のことである。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」と定義している。本研究ノートで取り上げる授業実践も、溝上の定義に当てはまることや、「ディベート式プレゼンテーション大会」の授業実践は、学びにおける深いアプローチの面（ディープアクティブラーニング）の領域に重なることも述べていきたい。

2 基礎演習 I 全体の流れとディベート実践の位置づけ

基礎演習 I は、K 大学 1 年全体の前期の必修科目であり、大学での学修のための基本を学ぶという目標は全学共通であるが、その素材やアプローチは各コースの特性に合わせて少しずつ異なっている。2015 年度国際コースの基礎演習 I の受講生は 65 名（1 ゼミ 13 人で、計 5 ゼミ）であり、授業の内容は、表 1 のように構成されている。高校から大学へ環境移行したばかりの 1 年生はまだ友達関係が十分に築けていない点を考慮し、まずは各ゼミの 13 人で慣れてから、徐々に 65 名の合同ゼミにも慣れるように順序づけられている。

前半 5～6 回の個別ゼミでは、本の読み方、レポートの書き方など基本を学んだあと、第 8 回～第 9 回は 2 年から 4 年生までの上級生が様々な海外体験について PPT を用いたプレゼンテーションをし、質疑を行う時間が配置されている。基礎演習は毎年 10 人前後の少人数クラスであり、毎回グループの話合いやワークなどがあり、講義型ではないという意味では全過程がアクティブラーニングであると言える。後半に配置されているディベート式プレゼンテーション大会は、大会で終わるのではなく、①同じテーマを用いて個々人が前期の期末レポートとして提出すること、また、②後期に開催される学園祭で自分たちの学びの内容の一部を班ごとに共同作業のポスターを展示すること、が義務づけられている。

表 1 国際コースの基礎演習 I の内容構成 (2015 年度)

回数	個別・合同	内容	補足説明
1	個別ゼミ	オリエンテーション・他己紹介	上級生も手伝いに参加、ワークあり
2	個別ゼミ	大学での学びの入門。	
3	個別ゼミ	ノートの取り方 本の読み方	
4	個別ゼミ	本の読み方 レポートの書き方	
5	合同ゼミ	友だちづくりワークショップ	体育館でコース1年全員と上級生が参加
6	個別ゼミ	レポートの書き方	ワークあり
7	半合同	共愛学園の歴史	資料で学習してからアメリカンボード見学
8	合同ゼミ	先輩の海外体験を聞く①	2-4年の上級生がプレゼンテーションをした後、質疑応答
9	合同ゼミ	先輩の海外体験を聞く②	
10	合同ゼミ	PPTの作り方 ディベートに関する概要紹介	パソコン室で個々人がPPT作成の作業体験後、教員がディベートの概要紹介
11	個別ゼミ	班ごとにディベート準備	個別課題やグループ作業ののちプレゼンテーションとディベート
12	個別ゼミ	班ごとにディベート準備	
13	合同ゼミ	ディベート式プレゼンテーション大会(1)	
14	合同ゼミ	ディベート式プレゼンテーション大会(2)	
15	合同ゼミ	ディベート式プレゼンテーション大会(3)	
試験日	個別ゼミ	レポート提出・個人面談	ディベートのテーマで個々人レポート作成

2015 年度以前の取組： 2015 年度以前の国際コース基礎演習 I では、ディベート式ではないが、グループのプレゼンテーション大会は実施してきた。そのプロセスには、共同作業として、①テーマを決める過程でブレインストーミングと KJ 法に接する。②グループで議論しながら資料調査をする。③グループで議論しながら PPT ファイルを作成し、全員の前でプレゼンテーションを行う、ということが含まれていた。そして、前期の期末課題はグループで行ってきた内容を用いて、④個人作業として、引用文献を取り入れながらレポートを作成して提出することや、⑤後期の学園祭で共同作業をしてポスター展示をする

いうことも数年間実施してきた。学生が主体的に楽しく取り組めていたので、いままで実施してきたプレゼンテーション大会も十分にアクティブラーニングであったと言える。

しかし、以前の取組は、形式上はアクティブラーニングではあるものの（データは取っていないが）経験的に、深い学びには一歩足りないと感じていた。そこで、2015年度からアクティブラーニングの質をよりディープに変換することの試みとして、「ディベート」を取り入れたプレゼンテーション大会にしたのである。テーマ間の比較だけでなく、テーマ内の賛成と反対の比較が可能になったのが以前とは異なる部分である。

実質、「これから班ごとに分かれてディベート型プレゼンテーションをする」と告知されてから早いチームは2週間内に準備して3週目にディベートをすることになる。また、ディベートなので、賛成・反対の論理を展開する必要がある。個々人の好みと価値観で判断すると論理の対立だけではなく、感情の対立に転化する恐れがある。それを踏まえ、勝ち負けによる感情などがネガティブにつながらないように、テーマ別の肯定派・否定派の組分けは、学生達本人の意見と関わりなく、教員が学生番号を用いて機械的に分けた。

3 ディベートの手順と気づき

3-1 テーマ・班決めと準備の流れ

既述の通り、この講義は1年生前期の学生を対象とするものなので、参加学生が国際関係や国際問題に関する予備知識を深くもっていることは想定せず、ニュース等でよく取り上げられている話題をテーマとした（表2参照）。また、各ゼミ担当教員が関わりながら指導することも念頭においたので、教員自らがテーマをひとつずつ選び、全員で検討してから決めた。従って、学生にはテーマを決める権利・自由はなかったことになる。

表2 ディベートに用いたテーマ

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ①「日本は、不足する労働力を補うために、外国人の移民を積極的に導入するべきか」 ②「電力需要を賄うため、原子力発電所を積極的に再稼働するべきか」 ③「日本はアジアインフラ投資銀行(AIIB)に参加するべきか」 ④「非イスラーム教徒は、預言者ムハンマドの風刺画を自主規制すべきか」 ⑤「発展途上国・新興国は、先進国と同様、温室効果ガス削減の義務を負うべきか」 |
|--|

この取組は、ディベートである上、勝ち負けを決める大会でもあり、論理的なディベートが感情の対立に重ならないようにする必要があった。あくまでも根拠資料に基づいて論理を展開する訓練という位置づけにして、班決めは個々人の賛成と反対の意見と関係なく、各ゼミ担当教員が自分のゼミ生を2チームに分け肯定派と否定派に充てた。個人的には議案に賛成だけれども否定派に割り当てられた場合は反対の立場になりきって、論理的に対応を考えることを強調した。

表 3 準備過程の流れ

授業・授業外	流れ	実際に行ったこと	補足説明
合同ゼミ	1. テーマ決め・全体説明	国際社会でホットな話題から教員が選定、やり方のイメージを説明した	指導の面を考え、各教員がテーマを決めた
準備1回目個別授業	2. 班決め	同一テーマを同じゼミで賛成・反対に班分けした	授業外にも集まる必要があり、ゼミ単位で同じテーマにすることが効率的
	3. 教員による提示	教員側から簡単な背景説明と資料提供	足りない部分は全員で調べるように指示
	4. 個別課題を指示	相手チームへの質問を5個考え、各自教員へGメールを送る	他人任せではなく、個々人が考え参加する形にするためにとても重要/一人5個ずつの質問が全員分集まると30~35個になり、チームで共有しながら話やすくなる
準備(授業時間外)	5. 教員の補助	教員は個々人から送られてきた相手チームへの質問をまとめて、賛成・反対チームにそれぞれ送る/班ごとに相談を受ける	1年生前期で、まだ人の前で意見をあまり言えない学生でも参加できる形になる。チームの全員分のコメントが集まったことにより、共有が早まり議論がしやすくなる
	6. 議論・PPT作成	学生は班ごとに自分たちの資料に基づき議論しつつPPT作成	授業外で、賛成・反対チームごとに集まり議論・作業
準備2回目個別授業	7. 両チーム一緒にミニ実体験	お互いに雰囲気をつかむため、準備したファイルでプレゼンテーションをし、ディベートもしてみた	お互いに相手チームの準備程度や、質問や答えなどについてヒントを得る
	8. 教員の補助	すべてのPPTファイルには、根拠となる資料の出典を書くことなど、引用のルールを説明	研究倫理、著者権問題などを意識させる
準備(授業時間外)	9. 個別課題を指示	個々人、相手チームから出されそうな質問を5個予想して、それに対する答えを作成してGメールで教員に送る	他人任せにしないで、個々人が全員自分なりに考えるようにするための装置/一人5個ずつ考えてチーム全体で合わせると、相手から出されそうな質問とその対応は30個~35個になり、チームで共有しながら検討しやすくなる
	10. 教員の補助	予想される相手チームからの質問への答えをまとめて各チームの全員に送る。班ごとに相談を受ける。教員は、両チームの様子を知っているが、相手チームには伝えない	全員で共有し、議論を進めやすくなる。学生の緊張感を維持させるため、他チームの様子は伝えない。

注. この授業実践に参加したのは5つのゼミであり、ゼミ担当教員がそれぞれ対応した。具体的な対応の詳細は、ゼミによってすこしずつ異なるが、本稿では第一著者であり、5ゼミのなかで一番目にディベートを行ったテーマ①のゼミを例に書いている。

表3で示したように、学生は基礎演習の授業時間内だけでは準備ができないことが分かり、時間外に何度も集まって議論しながら準備を行った。一つのチームは集まる場所を教員の研究室にしていたので、彼らの様子を垣間見ることができた。学生は時間割が異なり集まるのも大変そうだったが、全員でなくても2-3人ずつ分担を分けて下位グループのミーティングをしたり、放課後全員が集まったりと、教員の指示がなくても週に3-4回集まり自発的に学習しながら準備をしていた。準備過程で何度も注意を喚起させながら強調したことの一つは、本やインターネットなどから参考してスライドを作成した場合、必ずその出典をスライドに書き込むようにしたことである。単なる、思いつきの主張ではなく、すでに公表されているデータや主張との合わせて考える習慣を身に付けさせるためであった。

3-2 大会当日の流れ

ディベート式プレゼンテーションの大会のためのゼミごとの学習・準備から大会実施の司会まで、各ゼミ担当教員の責任で行われた。プレゼンテーションとディベートを行う当番ゼミ以外は、教室で観衆になり、見ながら評価シート（表 5 参照）に記入することが求められた。大会当日の大まかなやり方は図 1 の大会ポスターに示した通りであるが、詳細はゼミ担当教員の裁量に任されていた。本ノートでは、テーマ①のゼミの例をもって紹介する。

表 4 ディベート当日の流れ

	流れ	時間
プレゼンテーション	1. 賛成派(A)	10分以内
	2. 反対派(B)	10分以内
ディベート1ラウンド(約10分)	3. 相手チームへの質問を考える(A,B)	2分以内
	4. BがAへ質問	
	5. Aはチームで答えを考える	2分以内
	6. AはBへ答える	
	7. AはBへ質問する	
	8. Bはチームで答えを考える	2分以内
	9. Bは、Aへ答える	
ディベート2ラウンド(約10分)	3～9を繰り返す。	
最終弁論	両チームのプレゼンテーションや質疑応答を含めて各チームの主張を考え、最終弁論を行う。	各チーム 2分以内

図 1 大会のイメージを知らせるポスター

一つのゼミが二つの班（賛成班と反対班）に分かれたので、一つのグループは 6 人か 7 人構成である。準備段階のミニ体験の結果、ディベートを行うときには、椅子とテーブル

は使用せず両チームは向かい合って
全員立ったまま行うことにした。

チーム内で議論が必要なときは瞬時にメンバーが丸くなり顔を合わせた方が議論しやすくなると判断したからである。6-7人が机に座り一列になると長すぎて全員が瞬時に顔を合わせることが難しく、また、3-4人ずつ2列に座ると瞬時に体をひねる必要があるが、ミニ体験では身体を動かさないことも起きていたからである。

また、ディベートを行うゼミ以外の学生たちは審判になり、チェックリスト(表5参照)にチェックをしながら聞き、評定と感想を記入することを義務付けた。肯定派(A)と否定派(B)のどちらが良かったかを最終判断の際には、学生1ポイント、教員5ポイントで投票して勝ち負けを決めた。学生のみポイント集計では勝ちでも教員のポイントが学生の意見とは逆転して、教員の視点・判断と学生の視点・判断が異なる場合があった。このように学生と教員のポイントのつけ方の違いも含め、最後に教員一人一人が両チームへコメントを行った。

表5 ディベート評価シート

ディベート評価シート		2015.7.9							
		学生番号							氏名
0点 特に評価しない									
1点 普通									
2点 良い									
3点 際立って良い									
	プレゼンの説得力	主張には裏付けとなるデータが	相手の論点に噛み合った質問をして	相手の主張の各論点に、反論しているか。	質問にきちんと答えられたか。	最終アピールの説得力	ど時間配分、声の聞こえやすさ		合計点
チーム側									
チーム側									
私ならば、どのような質問をす	肯定側への質問				否定側への質問				
<総合感想>									

4 ディベートをめぐる感想・評価

4-1 ディベート当事者の感想

本節では、ディベート終了直後のディベート当事者の学生たちの感想をそのまま載せる。学生たちには、ディベート終了後3日以内に各自の感想を担当教員にEメールで送るよう求めた。担当教員は、賛成班・反対班両方の感想をまとめて、次の週の授業時間に配布し、互いの感想も共有するようにした。

表6は移民受け入れに対する肯定側の班の感想であるが、全体的にみると、①よくわからない、不安→②調査、準備、みんなで議論、教員のアドバイス→③本番の緊張感と楽しさ、相手側の説得性→④結果として充実感、個人的な反省、ゼミ生同士の親近感向上とい

った内容が書かれている。

表 7 は、移民受け入れに対する否定側の班の感想であるが、①難しい、考えるのが大変→②調査、準備はしたものの足りなかった→③本番の緊張感、予想できなかった質問→④良い勉強になった、個人的な反省、みんなで協力できたという内容が書かれている。賛成班に比べると「楽しい・わくわく・充実感」という積極的にポジティブな情緒表現はあまりない。勝ち負けがあったので、同じ内容でも勝ちと判定された肯定側の班はポジティブな評価が多く、負けの判定になった否定側の班は学びの意味はあったものの、負けたことによって楽しさという気持ちは少なくなってしまうかもしれない。

表 6 プレゼンテーション型ディベートを体験した当事者の感想 1 (肯定側チーム)

<移民受け入れ賛成班>

1. 特に何もしてないのにとっても緊張した。自分たちのグループや相手のグループの発表を聞いて自分が思ってる以上に皆しっかりとした内容で、私は話し合いに参加できない日が多かったので何か申し訳ないなと思った。討論はやっててとても楽しめた。最初はやってもつまないだろと思っていたが、実際こんなに楽しいとは思わなかった。それぞれの質問やその回答を○先生が分かりやすくまとめてくれてとても助かった。ありがたかった。緊張して内容がまとまってなくてどうしようかと思ったけど○先生のまとめで何とか相手に伝わった。
2. ディベート大会を終えて何よりも達成感を味わいました。この数週間の間準備してきたことのほとんどが役に立ったなと思います。何よりよかったことはチーム全員が参加できたことです。始めは何をしていいかわからなかったため話し合いや役割分担が上手くできず、とても苦戦しました。しかし、先生が全員の意見をまとめてくださった事をきっかけに皆が意見を共有し始めるようになりました。するとディベートではいままでの苦戦した話し合いが嘘のように一斉に皆が意見を出し、全員の意見を取り入れた発言が出来ました。困ったことは集まる時間があまり取れなかったと言うことです。発表までの時間が短いためゼミ以外で集まろうとしましたが、なかなか皆の時間が合わず発表内容の確認が充分に出来ませんでした。やはり準備期間は長くあった方がよりスムーズな発表が出来ると思います。とても大変だったけれど、充実した数週間を過ごせました。
3. 移民受け入れについて調べて発表すると聞いたときは、本当にできるのかな？と不安に思ったし、みんなの足を引っ張らないようにしなきゃいけない。という思いが強かったと思います。みんなで協力するというのが自分にできるのか不安な面もあったのですが、いざ本番になるとみんなの存在がとても心強くて頼もしかったです。この発表を通して、ゼミのみんなとの距離が縮まったような気がしたので、それも嬉しいと感じました。今回の発表での反省点は、自信をもって発言するということができなかったことです。相手から

来た質問に対して、どう答えようか不安に思った感情がそのまま答えるときに出てしまったので、説得力が少し欠けてしまったと感じました。良かったと思ったのは、一人一人が自分の役割をこなせて、賛成班の全員で協力して発表ができたことです。誰か一人に任せきりとか誰か一人が何もしていないというようなことはなく、みんなが自分達の意見を支持してもらいたいという気持ちで発表していたと思います

4. 今回初めてディベートをしてみて最初のうちはまず何をしたらいいのかわかりませんでした。これまで移民政策について考えたこともなかったので、一から勉強しました。賛成派と反対派に分かれて自分は本当は移民政策について反対の意見だったので、賛成の意見は考えられないと思っていました。ですが、今回色々調べてみて賛成意見に変わりました。班のみんなと一緒に考えているなかで、自分の考え方などまだまだたりないなと思いました。ディベート本番は、他のゼミの人がいるなかで話すというのはとても緊張しました。けれど議論している時なんだかわくわくしました。どんな質問がくるのか、その質問にどのように答えるか班のみんなで考えているときなんだかわくわくしました。お互いにディベートをして結果は賛成派が勝利したけど、五分五分だったので、いい経験ができたと思いました。今後ディベートをする機会がふえると思います。回数を重ねながらよりよいディベートができるようになりたいと思いました。

5. 今回の発表ではやっぱり自分に知識がないと満足のいった発表ができないと思いました。反対班の言っていることが分からないこともあったのでちゃんと前準備をしていればもっと盛り上がったんだろうなと思いました。でも、短い時間の中で知識を身につけ、パワーポイントを作り、練習したりしてとても楽しくできました。皆の仲が前よりよくなったと思います。後今回の発表で自分がいきなりのハプニングに弱いということを知りました。これを機に、ハプニングが起こってしまったときの対応も落ち着いてできるようになればいいなと思いました。あと〇〇さんの最後の賛成班のまとめをアドリブで言っていたのがとてもきれいにまとまっていて、すごくびっくりしました。今回の発表で一番印象に残っています。自分の中でまとめて言う力を自分も高めていきたいです。最後に、先生がくれたアドバイスのおかげでひとつの言葉をいろんな角度で見ることの大切さが分かりました。反対意見でも見方を変えてしまえば賛成意見になる、この考え方のおかげで今回の発表もなりたったのではないかと思います。すごくいい体験でした。

6. 今回のディベートは賛成班、反対班共に良くできたと思う。私は賛成班で勝負という意味では勝つことができたが、反対班の自分たちとは違う視点での考え、主張に納得せざるを得ない部分もあり、反対班の下調べがよくできているなと思った。また、私は正直、自分を含めた賛成班の準備段階の様子を見て、当日までにしっかり仕上がるのか不安だった。しかし、一人一人が「移民受け入れ賛成」という立場になってよく考えたということと、

○先生の専門的な知識によるサポートのおかげでなんとか完成させることができた。特に心配だった相手チームからの質問の返答は、7人全員で今まで勉強してきた内容をフル活用して答えることができて本当に良かった。困った点は班のメンバー全員が集まれる時間があまりなくて、情報の共有が疎かになってしまったことである。その結果、発表の初めにドタバタしてしまった。ディベートはすごく難しかったが、大学生の勉強がどういうものなのかが少しわかった。また、ゼミのみんなとも仲良くなれたので良かった。ディベートをやって良かったと思う。

表7 プレゼンテーション型ディベートを体験した当事者の感想2（否定側チーム）

<移民受け入れ反対班>

1. 準備過程から、終わるまでを振り返った感想

困ったこと：役割分担が上手くいかなかったこと。それぞれの役割を指示してくれる人がいるわけではないので、作業を行う人と行わない人の差が激しかった。自主的に作業を行う人に任せっきりになってしまった。

良かったこと 強制的に決められたグループの中でも、共に作業していくうちに、少なからず仲間意識のようなものが生まれたように感じた。だんだん顔を合わせる中で、少しずつお互いを知れた。

改善点：最初にもっと詳しくディベート型プレゼンテーションの説明をしてほしかった。そうすれば、その後の作業がもっとスムーズに行えたように感じる。

意義：社会に出れば、必ずグループワークに参加する必要がある。それゆえ、大学に入学したばかりのこの時期に大変なグループワークを経験できたのは、とても意義がある。この経験を通じて学んだことを今後のグループワークできっと活かせるだろう。

2. 現代の問題についてのディベートを行うのは初めてで、とても難しいと感じました。どうしたら説得力のある意見を主張できるか、相手を納得させるようなことが言えるかを考えるのはとても大変でした。

私は反対派としての意見を考える立場でしたが、個人的に最初は賛成だと思っていたため、個人的な反対意見を考えるのは難しかったです。

しかし、反対派として様々な意見を出したり、インターネットや本などで調べたりするうちに、個人的にも反対派の立場になりつつありました。賛成か反対か、はっきりとは決めることができませんが、賛成からどちらかという反対に移る自分をみると、どれだけ自分は世の中の政治や社会の仕組みについて知らないかがよくわかりました。

また実際にディベートをやってみて分かったことは、相手からされる質問と、こちらが予想していた質問が、意外と違うということでした。相手からされるであろう質問を考えたとき、正直これだけ説得力のある意見を主張したら、質問できるようなことなんて少ないのではないのかな、と甘く考えていました。しかしやってみると、まったく思い付きも

しなかった視点からの質問をされたりして、非常に驚きました。このことから、本当に幅広い視野を持って意見や情報を収集しなければならないことがよくわかりました。

今回のディベートで、自分の知らないことがたくさんあるということと、幅広い視点から物事をみなくてはならないことを学びました。次に生かしていきたいです

3. 今回、初めて大学でのプレゼンテーションおよびディベートを行って、中学、高校の時に蓄えたパワーポイントの知識・技能がうまく活かせたと思いました。しかし、パワーポイントを見せながらの口頭の説明がおろそかであったり、資料についての解説が荒いなどの指摘をされてしまったので次回には改善したいです。発表の中で映像を見せたことが印象に残ったといくつか賛賞の意見をいただいたので、アドバイスをいただいた先輩に感謝です。移民政策についての賛否というスケールの大きい議題で〈私を含めて〉本当によく皆資料を集めてくれたと思います。準備のための会議にて広い知識を披露してくれたことから、それがすぐにわかりました。当日は緊張のためか、蓄えた知識を全て発揮できなかったことが何より心残りです。今後あのようなことがないように、自分ももっと積極的に参加して、知識を本番で披露することができるようお手伝いしたいです。そして私もディベート技術を身に付けたいです。

4. 今回は大学に入ってから初めての弁論会ですか、まだ経験などもなかったため、そこまで理想的ではありませんでした…自分はPPT作りにもぜんぜん参加してなくて、ほぼ人任せでした…自分は挑戦しようと思ひまして、相手から質問された問題を答える役割をしましたが、しかし、初めてだから経験がないせいか自分の日本語力まだしっかり身につけていないせいかわかりませんが、とても緊張して、なかなかうまく表現できませんでした、弁論会が終わった後、やっともっと適切な答えが見つかる…。

今回自分チームの良い点は、みんなちゃんとだす問題や相手から出されそうな問題をちゃんと考えたところだと思います。相手チームの良い点はPPTでグラフがあった点だと思います、とてもわかりやすくてためになりました。今後まだこのような弁論会たくさんあるので、もっともっとじぶんを磨いて、自分の役割を上手くやって、もっとできるようになりたいとおもっています。

4-2 聴衆立場の学生の感想

次に、ディベート当事者ではなく、ディベートを見ながら表 5 に示した評価シートに記入し判定を行い、自分たちの試合の参考のためにも考えながら聞いていた聴衆の学生の感想はどうであったろうか。総合感想の一部を、表 8 に示す。聴衆として見ていた学生たちの感想で多かったのは、①初めてなのに、②賛成派も反対派もしっかり準備されている、③さまざまな工夫、④流れが分かった、④自分たちもしっかり準備したい、といった内容であった。

表 8 聴衆として見ていた他ゼミ生からの感想

1. 私の立場としては肯定側だったけど、否定側の意見の動画を見たり、意見を聞いたりしてなるほどと思った。だから聞いている側も楽しかった。短い時間の中でこのようにディベートをするのは大変だし、頭を使うので、私たちがやるときも頑張りたいと思った。
2. 両者ともしっかりデータを調べたり、説明をしていました。質問・応答のところはもう少ししっかりと行った方がいいと思いました。でも、両者とも一生懸命していたのでよかったですと思います。今回は初めてのディベート大会であったが、肯定派否定派のスピーチや質問を見て私はどちらもなかなか悪くないと思った。互いに互いの意見を上手く相手に述べていたのではないかと感じた。
3. 裏付けのデータはどちらの班も立ちなかつたと思います。この大変なことをこれからやるのは緊張します。どうまとめればいいのか未だに分かりません。
4. 難しそう、時間の無い中でこれだけのプレゼンテーションができるのは素晴らしい。
5. 初めての発表なのに完成度が高いと感じた。
6. 最初からハードルが高くて、肯定も否定もきちんと意見があつて自分たちも頑張らなくてはと思った。表現の自由について頑張ります。
7. 初めてのディベートなのに、パワーも質問もしっかりしていて、とてもよかったです。○ゼミに友達がいるのですが、空き時間に集まっていますだったので、私もゼミの人と空き時間に準備していいディベートができればいいなと思いました。
8. 最初なのにとても作りがしっかりしていると思った。だきるだけ情報を集めて反論できるようにしなければいけないと思った。純潔という考えは浮かばなかつたので、すごく参考になった。
9. 相手の主張も予想して準備していたのが良かったです。
10. どちらの意見もしっかりまとめられていて、納得することが多かったです。流れの確認ができたので、来週頑張りたいです。
11. 移民をうけいれるかどうかはとても難しいことだと思うが、○ゼミの議論を聞いて、反対側も賛成側もどちらもよくできたと思う。
12. 否定側の動画を取り入れているので、わかりやすく説得力があつた。
13. 否定側のプレゼンが動画を使用したりして印象に残つた。
14. 賛成意見も反対意見もそれぞれ納得できる部分があるので、ディベートは難しいと感じた。
15. すごく上手だった。自分も頑張りたい。
16. 1回目なのに、動画など使っていて、様々な工夫がしてわかりやすかったです。自分たちのグループもそのぐらいできるようにしたいです。
17. こうやってプレゼンや討論するのだとこれからやる側にとってはすごくわかりやすかったです。賛成派も反対派もそれぞれの意見をキチンとわかりやすく伝えられていたと思いました。また、プレゼンも動画を使つたり、色々な映像も使つたりと、様々な工夫をし

ていてすごくわかりやすかったし、反対の方が良いか賛成の方が良いかすごく考えやすかったです。

18. 短い準備期間でしっかり準備できていて、すごいと思いました。

以上、大会 1 回目のディベートの当事者と聴衆の学生の感想を取り上げたが、3 週間にわたって 5 試合のディベートが行われ、準備期間含めて 6 週間の授業と授業時間以外の時間も含めて取り掛かったことになる。

6 週間ですべてのプレゼンテーションとディベートが終わってから、教員同士の感想会では、全員とても意義深い取り組みであり、従来の取組に比べて教員側の準備も増し大変ではあったが、教員にも学生達の学習に対する充実感や楽しさが実感できたという評価であった。

4-3 期末アンケートの評価

2015 年度前期の最後の基礎演習の時間に国際コース 1 年生全員に半期の大学生活について無記名アンケート調査を行ったが、その一部としてディベート型プレゼンテーション大会と関連して 10 項目の質問を行った。質問項目は、ディベート大会直後対面して話をするなかで聞いた感想などを参考にして作成し、次年度に向けて改善していくための確認の意味で行った（図 2～図 11 参照）。

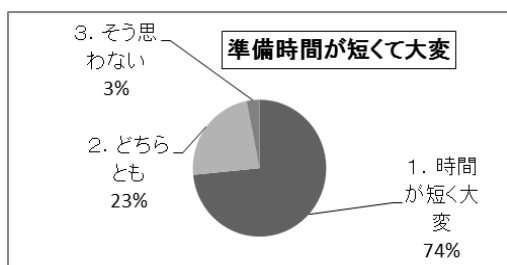


図 2 準備時間が短くて大変だったか

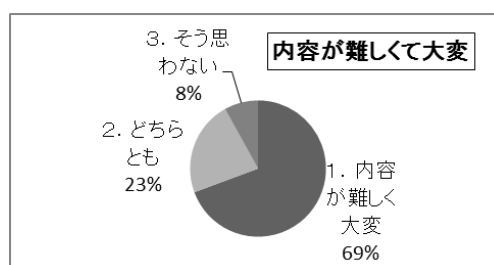


図 3 テーマ内容が難しく大変だったか

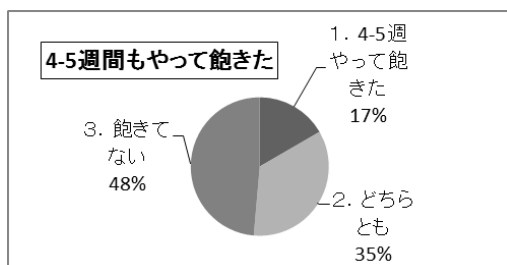


図 4 4-5 週間もやって飽きたか

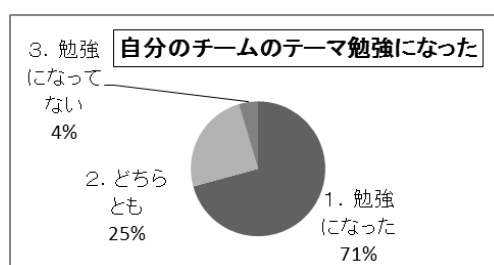


図 5 自分の班のテーマについて勉強になったか

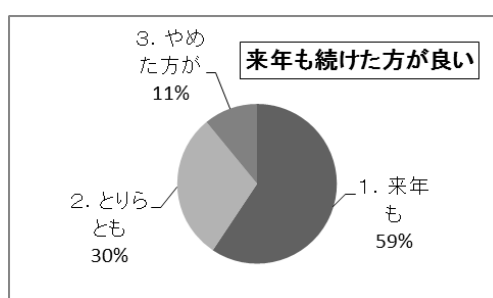
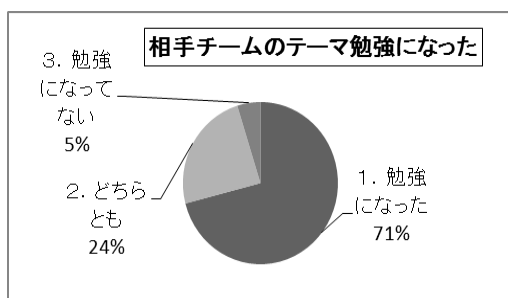


図 6 相手班のテーマについて勉強になったか 図 7 来年も続けた方がよいか

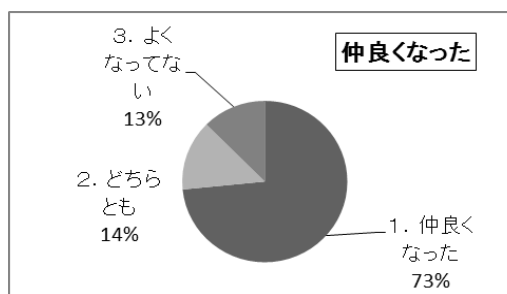
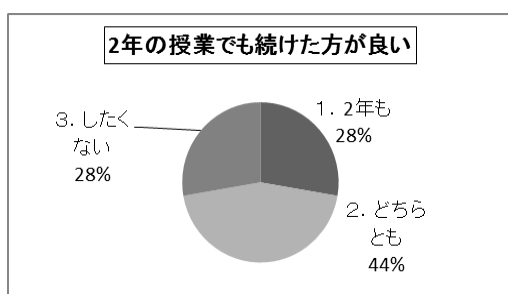


図 8 2年の時も続けた方がよいか

図 9 班で仲良くなったか

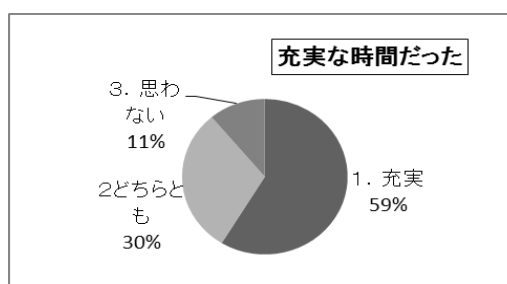
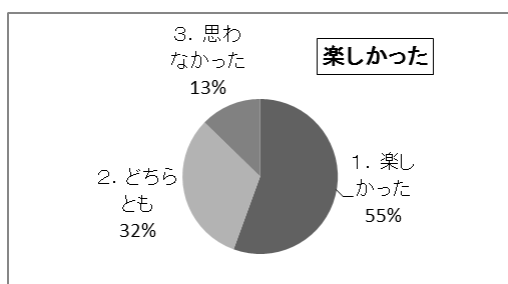


図 10 楽しかったか

図 11 充実した時間だったか

アンケートで聞いた項目は、1. 内容が難しく大変だったか、2. 準備期間が短くて大変だったか、3. 4~5週間もやって飽きたか、4. 自分のチームのテーマについて勉強になったか、5. 他ゼミのテーマについて勉強になったか、6. 来年の1年生もやるべきか、7. 2年生になった時もやりたいか、8. ゼミの友達と仲よくなったか、9. 楽しかったか、10. 充実した時間であったか、の10項目である。

図 2~11 全体的にみても、内容は難しく、準備時間も短くて大変だったけれども、勉強になり、楽しく、充実していたという方向へポジティブに答えているのが60%~70%で、20%前後がどちらとも言えないで、3%~10%前後がネガティブな反応を示している。表面的な雰囲気ではとてもよかったように見えても、やはりディベートやプレゼンテーションは負担感が大きく、その分、面白さや充実感も感じなかった学生が一定程度存在することも確認された。これは今後の改善を考える上での課題である。

具体的に調べたわけではないが、肯定側と否定側というチーム単位で勝ち負けが判定さ

れ、さらに獲得されたポイントも公開されたので、ポイントの数値が低かったり負けたりした班のメンバーは、意義はあるが面白さが減るといった反応がそれなりにあったように感じられた。

5 ディープ・アクティブラーニングの始まり

以上、2015年度から新たに取り組んだディベート式のプレゼンテーション大会の授業実践について、その準備や当日の流れ、当事者の学生と聴衆立場の学生の感想、すべて終わってからの簡単なアンケート調査による結果を紹介してきた。多くの学生にとって、大変で難しかったが、楽しく充実した学びになったという感想・評価が得られたが、一部の学生にとっては、十分に満足できず、よい学びに至らなかったという結果もあり、今後の改善のための課題も残された。担当した5人の教員の話合いにおいても、完璧ではないが、とても有益で面白かったという感想であった。

これらをふまえ、本節では、2015年度の1年生に新しく取り組んだディベート式プレゼンテーション大会が持つ意味やアクティブラーニングの実践としての位置づけについて考えてみる。溝上(2015)は、2010年のEntwistle, McCune, & Walkerの論文を翻訳し、学習への深いアプローチと浅いアプローチの特徴をまとめている。学習への深いアプローチの特徴として、「これまで持っていた知識や経験に考えを関連づけること、パターンや重要な原理を探ること、根拠を持ち、それを結論に関連づけること、論理や議論を注意深く、批判的に検討すること、コース内容に積極的に関心を持つこと」を上げている。

また、Biggs & Tangの2011年の論文を翻訳して、活動の「動詞」から見る学習への深いアプローチを整理したが、その動詞には「記憶する、認める・名前をあげる、文章を理解する、言い換える、記述する」学習活動を超えて、「中心となる考えを理解する、関連づける、論じる、説明する、身近な問題に適用する、原理を関連づける、仮説を立てる、離れた問題に適用する、振り返る」学習活動を深いアプローチだとしている(溝口, 2015)。

本稿で取り上げた、ディベート式プレゼンテーション大会を用いたアクティブラーニングは、単に講義式ではないという狭い意味のアクティブラーニングではなく、学生自らが調査し、理解し、論理づけて整理し、発表を行い相手への説得を試みながら、実際に現実の社会問題の解決の方向について考えるという意味で、1年生の前期の科目であるにも関わらず、深い学びにすでに入っており、ディープ・アクティブラーニングの実践であったと考える。

アンケート調査や記述の感想でも見られるように、全員が満足する学びにはなっていない部分があり、今後の課題が残されているままではあるが、高校を卒業してまだ日が浅い段階で、このような授業実践をすることにより、学習への新鮮な衝撃を与えることの意味は大きいと我々は考える。

文献

- 磯田節子・下田貞幸・内山 忠 (2013) 学生の主体的学びを育む Aalborg PBL modal と建築教育—本学への導入の可能性と課題— 熊本高等専門学校研究紀要 第 5 号, 99-107.
- ジョナサン・バークマン, アーロン・サムス (2014) 山内祐平・大浦弘樹・監修 上裕美子 (訳) 反転授業 Odyssey
- ダネル・スティーブンス, アントニア・レビ (2014) 佐藤浩章 (監訳) 井上敏憲, 俣野秀典 (訳) 大学教員のためのルーブリック評価入門 玉川大学出版部
- 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター (編著) (2015) ディープ・アクティブラーニング 勁草書房
- 溝口真一 (2014) アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換 東信堂
- 溝上慎一 (2015) アクティブラーニングから見たディープ・アクティブラーニング 松下佳代 (編) アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換 第 1 章 pp31-51 東信堂
- 文部科学省 (2014) 大学教育の質的転換に向けた実践ガイドブック リベルタス・コンサルティング

Abstract

An Attempt of Active Learning Through Debate The experiment of 2015 spring semester's first year seminar in International Course

Sunah Oh, Kenichiro Arai, Zhihai Xie, Hisao Ohnuma, Weitao Zhang

Key Words:

Active Learning, Debate-Style Presentation, Deepening Learning, Individual Assignments, Group Cooperation, First-Year Seminar, First-Year University Students

During the spring semester of 2015, we conducted six-week long active learning classes, "debate style of presentation contest", for the first-year students (13 students*5 seminars=65 students in all) of International Course at Kyoai Gakuen University. This article aims to reflect on the active learning experiment, review the process of education practice, and summarize the feedbacks and evaluation from the students. According to the survey, in the beginning, most students were confused about how it worked, and thus teamwork did not go smoothly within the group. However, later on as they did more research by themselves and worked together more while talking with each other, relationships within groups improved and comprehension of the study deepened. Students also said that they gained a variety of perspectives through the presentations and debate from other groups, and had the sense of achievement. On the other hand, there were also negative feedbacks from about 5-10% of the students. The first year students had not established mature friendship at the university life, as they just graduated from high school. Therefore it is of great significance at such a stage to take the active learning experiment on them with various practices such as researching, understanding, logical thinking, presentation, debate, and cooperation. Through the experiment we realized the necessity to review our teaching approach and expand active learning initiatives. Meanwhile, we felt obligated to deal with the negative feedbacks from the 10% of the students.